

令和7年度 卒業論文

佐賀県西部地区における方言敬語の使用実態

広島大学文学部人文学科
日本・中国文学語学コース
日本文学語学専攻
B223702 野口萌花

目次

1. はじめに
2. 佐賀県の方言
3. 先行研究
 - 3.1 「シャル敬語」について
 - 3.2 佐賀県の方言敬語について
4. 調査
 - 4.1 調査方法
 - 4.2 Microsoft Forms を用いた調査
 - 4.2.1 調査対象
 - 4.2.2 調査方法と調査項目
 - 4.2.3 調査結果と分析
 - 4.3 面接調査
 - 4.3.1 調査対象と方法
 - 4.3.2 調査項目
 - 4.3.3 調査結果と分析
5. おわりに
6. 参考文献

1. はじめに

本研究で取り上げる方言敬語とは、いうまでもなく、方言で表現される敬語のことであるが、日本全国における敬語調査を集大成した加藤（1973）によれば、西日本では尊敬表現の発達が見られ、幾通りもの敬語形式が併存し、そのなかでも佐賀県を含む肥筑地域は、敬語体系の複雑な発達がみられるとされる。筆者の内省でも、方言敬語を共通語に置き換えようとするとき、語感の微妙な違いから、共通語の敬語表現が必ずしも適切な表現ではないと感じることがある。このことから、方言敬語には、共通語では表しきれない微妙なニュアンスの違いが含まれていることが想像できる。この絶妙なニュアンスの違いを使い分ける方言敬語の使用には、敬意の度合いや使い方といった一定の規範意識が働いていると考えることができる。

本研究で対象とする佐賀県西部地区では、動詞に「ンサル」や「ンシャル」などを接続させ、敬意を表現する言葉が用いられている。「来る」の敬語表現である「いらっしゃる」を当該の方言敬語で表すと、「来んさー（キンサー）」・「来んしゃー（キンシャー）」などとなるが、筆者は、「来んしゃー」の方が「来んさー」より高い敬意を表しているように感じる。しかし、『佐賀県のことば』（2003）は、「ンサル」が方言敬語としては、最も高い敬意を表すと述べ、筆者の内省とは一致しない。また、「ンシャル」についても、若年層では命令形だけがよく使用されているとあり、これも「ンシャル」の形をよく用いる筆者の内省とは大きく異なるものである。

佐賀県の方言に着目した論文は、いずれも比較的古い年代のものが多く、現在の使用実態を十分に反映しているとは言い難い。加えて、佐賀県西部の方言敬語に焦点をあてた調査は、管見の限り見受けられない。よって本研究では、佐賀県西部を対象とし、方言敬語の現在の使用実態を明らかにすることを目的とする。

2. 佐賀県の方言

九州の西北部に位置し、長崎県、福岡県、熊本県とともに肥筑地域に分類される佐賀県の面積は、約 2,400 平方キロメートル、10 市 10 町で構成され、人口は約 83 万人¹である。その佐賀県の方言は、地域ごとに四つに大別される。佐賀藩にあたる地域で使用されていた「佐賀方言（東部）」と「佐賀方言（西部）」、唐津藩と幕領であり県北部にあたる地域で使用されていた「唐津方言」、対馬藩の飛び地で県東北部にあたる地域で使用されていた「田代方言」である。特徴として、「雨のザーザーで降る」といった三連オノマトペや格助詞の「の」の使い方などがよく挙げられる。『佐賀県のことば』（2003）では以下のように説明し、佐賀県の方言区画図を【図 1】のように示している。

この肥筑方言のなかで佐賀県域の方言に著しい特色としては、アイ連母音が拗音化し

¹ 2025 年 2 月時点

て、「鯛」がチャー、「大工」がヂャークとなることや、条件接続表現で「きり」に由来するとされるギー系統の助詞がさかんであること、「バンタ」「カンタ」「ノマイ」など文末助詞に対称の代名詞が融合してできた文末助詞のさかんなこと（ただしこの場合は唐津などをのぞく）などがあげられる。(pp.2-3)



【図1 佐賀県方言区画図】



【図2 現在の市町村境界線における佐賀県方言区画地図】

3. 先行研究

3.1 「シャル敬語」について

☐ 「「入らっシャル」などの「～シャル」（「～サッシャル」）敬語法について」（1955）

藤原（1955）は、「いらっシャル」に代表され、全国各地に散在する「～シャル（～サッシャル）」という敬語法について、その歴史的経緯と日本各地における方言の実態、および現代の動向を体系的に考察している。九州地方では、肥後以北の西側九州でこの敬語法が見られるとし、以下のように説明している。

肥後以北の西がわ九州では、「せ（させ）・られる」の複合ができて、「シャル・サッシャル」がおこなわれており、さらにこれは他の形にも進化している。（中略）北九州筑前地方では、「シャル」がよく聞かれる。（中略）さて、筑後を中心区として、肥後から肥前にかけての地域では、「シャル・サッシャル」が、さらに「ス・ラス・サス」というような形にも進化している。（中略）以上の「ス（ラス）・サス」は、「シャル・サッシャル」の終止形がいきなり「ス・サス」になったのではなくて、「シャッタ」「サッシャッタ」が「シた」「サシた」となることが先におこり、この「シ」「サシ」という新しい連用形が、四段動詞一般の活用形式からの影響で、終止形「ス・サス」を産むこと

になったのではないか。(pp.2-5)

近古(中世)の「せらるる・させらるる」から「シャルル・サシャル」を経て「シャル・サッシャル」となったとされるシャル敬語であるが、地域によってさまざまに進化・転化し今日に至っている。佐賀県においても、「ス・サス」、「ッシャル」などが存在しているが、従来の「シャル・サッシャル」とは違いを持って使用されているようである。本論文においても、「シャル敬語」と一括りで表記するのではなく、シャル敬語から転化した表現も一つの方言敬語の形として捉え調査を進める。

☐『方言の研究』「シャル敬語の地理的・世代的分布：長崎街道グロットグラム調査を通じて」(2017)

塩川(2017)は、会話の相手を先生と友人とで分け、「先生は居ないよ」と返答する場面における敬語の使用を調査している。調査の結果、第三者待遇場面におけるシャル敬語の運用について、佐賀県西部の地域では、聞き手が誰であろうと一貫してシャル敬語を用いる傾向にあることを明らかとした。

これら第三者待遇場面におけるシャル敬語の運用には明らかな地域差が認められる。福岡県下および田代から佐賀にかけての地域では飯塚や神埼、境原など一部地域を除き聞き手(対者、ここでは友人か先生か)が誰であるかによって、敬語を使用するかどうかが左右される傾向にある。その一方で、牛津から嬉野にかけての佐賀県西部の地域では、世代に関わらず聞き手が誰であろうと一貫してシャル敬語を用いる傾向にあり、旧来の、伝統的な敬語運用がなされていることが明らかとなった。(p.304)

また、シャル敬語の非人称対象への使用に関して調査を行っている。

用例(2)²に示したものと同様の「猫が(あなたのことを)覚えとんしゃーね」という表現について、比較的多くの話者が理解を示した【図7】。シャル敬語を用いるとする福岡県および佐賀県に注目してみると、福岡県では若年層から老年層にかけて広く猫に対してシャル敬語を使用することを受容する様子が確認されるのに対し、佐賀県では中年層以上にその分布が偏っている。福岡県に比べて佐賀県の若年層ではシャル敬語を猫に対して使用することへの受容度が低い様子がうかがえる。

この状況は旧来の敬語運用をとる様子が確認された図6-5・図6-6の結果と矛盾しない。つまり、佐賀県下の若年層にはシャル敬語は狭義の「尊敬語」としての認識がな

² [飼い猫が来客にすり寄る様子を見て] アー、ネコガ オボエションしゃーネー。あー、猫が(あなたのことを)覚えてるね。(塩川(2017)より)

されているため、一般に敬語の対象とならない猫に対してシャル敬語を用いるのは不自然であると結論付けられたのである。(pp.307-308)

猫に対してシャル敬語を用いるという、従来記述されてきたシャル敬語とは異なる使われ方を発見している。調査の結果、佐賀県においては、老年層で猫に対して使用することが許容される一方、若年層では、許容の割合が低く、シャル敬語を狭義の「尊敬語」として認識していることが確認できるとする。シャル敬語の受容度において世代間の差が見られている。

3.2 佐賀県の方言敬語について

①『佐賀県のことば』(2003)

『佐賀県のことば』では、尊敬の表現として、「ンサル」、「ンシャル」、「ナル」、「ゴザル」、「ス・サス」、「ヤル」、「ル・ラル」の7つを挙げているが、このうち「ナル」、「ゴザル」、「ヤル」、「ル・ラル」について、若年層での使用頻度の低下を指摘している。また、「ンシャル」に関しても、若い世代では命令形だけがよく使用されているとする。方言敬語としては最も高い敬意を表す表現として、「ンサル」を挙げ、その「ンサル」の転じたものとして「ンシャル」を記している。「ス・サス」は、敬意が低いとするが、伊万里などでは低い敬意の表現として用いられていることを述べている。

「ンサル」(行キンサー〈西〉・行キンサツ〈東〉)は、(ナサルの転じたものとされ)全域、全年齢層に用いられ、方言敬語としては最も高い敬意を表すが、親しい間の日常会話で使われることが多く、やや敬意を添える程度である。

ナンテ インサッタ (何と言われた?)

ナンバ ションサーデスカ (何をしていらっしゃるのですか?)

西部と東部とでは活用に違いがある。西部では、行キンサレン(いらっしゃらない)、行キンサイタ(いらっしゃった)と、下二段活用を残しているが、東部では行キンサラン(いらっしゃらない)、行キンサッタ(いらっしゃった)のように五段活用化している。

「ンシャル」(行キンシャー〈西〉・行キンシャツ〈東〉)は、上の、ンサルの転じたもの。親愛感があり、身内の目上などに対して使うことが多い。若い世代では、クンシャイ(ちょうだい)のように、命令形だけがよく使われるようになっている。

「ナル」(行キナー〈西〉・行キナツ〈東〉)は、ナサルの転じたもの。やはり西部では行キナレン・行キナイタであり、東部が行キナラン・行キナッタである。ドケーモイキナレン(〈あの人〉は)どこにも行かれない)。この形式は若年層ではあまり用いられなくなっている。

「ゴザル」も助動詞として、行キゴザー・行キゴザッタのように、動詞連用形に直接

して用いられる。東部のものはかなり衰退して敬意も低く、来ゴザイのような命令形が主である。この命令形が西部の一部では来ガイのように転化している。この形式も若年層ではあまり用いられなくなっている。

「ス・サス」(行カス・見サス)は、敬意は低いが親愛の情を表わす。命令形は東部の田代域でのみ見られる。カイナイサンノ オチサシタ(雷さんが落ちられた。)など。なお、伊万里などでは低くない敬意の表現として聞かれる。

「ヤル」も衰退しているが、命令形がよく用いられている。ハヨー キヤーイ(早くおいで)、クイヤイ(食べなさい)など。この形式も若年層ではあまり用いられなくなっている。

「ル・ラル」(行カツ・来ラッ)は、第三者に関してのみ用いられるが、それもごく身近な者に限られる。

例) ウチントガ イカイタ(夫が行った)。

この形式も、若年層ではあまり用いられなくなっている。(pp.14-15)

「1. はじめに」で述べたように、筆者は方言敬語において「ンシャル」を比較的頻繁に用い、「ンサル」よりも高い敬意を表す表現であると認識している。その立場からすると、方言敬語のなかで「ンサル」を最も高い敬意を表す言葉としている点や、若い世代では「ンシャル」が命令形のみで用いられているとしている点について疑問が残る。また、2003年時点で「若い世代」とされた話者層は、2025年現在においておおよそ30代から50代に相当すると思われるが、30代から50代の話者において、「ンシャル」形の使用が命令形のみ限定されているのか、あるいは他の世代と同様に命令形以外の用法も認められるのかといった点を含め、世代間における方言敬語の使用方法の差異を確認したい。さらに、方言区画の中に伊万里市の一部地域を含む佐賀県西部地区において、「ス・サス」がどの程度の敬意を表す言葉として用いられているのかについても明らかにしたいと考える。

②『九州方言考』「佐賀県方言区画概観」(1999)

小野(1983)は、動詞の敬讓表現を「読む」または「読んでいる」に敬意をそえる場合を例として説明しており、未然形に「ス」をそえる「ヨマス」、「なさる」の訛った形である「ヨマッシャル」「ヨミンサッ」、「ヨミゴザル」、「なる」の訛った形を含む「ヨミオイナッ」の4つを挙げている。

「読む」又は「読んでいる」に敬意をそえる場合

未然形にスをさえるヨマスは全地域に行われるが、敬意の程度は地域によつて異なる。一般にはこれには敬意を含まず、むしろ目下に対して用いるのに、唐津地区や西松

浦地区³では敬意を含んでいる。したがってヨミオラス、ヨミヨラス、ヨンヂョラスなども、敬意の点で注意を要する語である。

これよりも敬意の高いヨマッシュアル、ヨミオラッシュアル、ヨミョラッシュアルは唐津、田代地区のみにあり、他の地域ではこれに対してヨミンサツ、ヨミ（ヨ）オンサツ（地方によつて音に若干の変化がある）を用いる。「なさる」の訛つた形で、敬意の幅が広く、きわめて普通に用いられる。（中略）

ヨミゴザル、ヨミオ（ヨ）イゴザルは唐津地区では用いない。他の地域では全般に用いられるが、敬意の程度が東西によつて異なっている。西部地区では、ヨミオイゴザール（ル）がヨミオンサーよりも敬意が高い。大浦、多良地方も同様である。これが東に移るに従つて敬意がうすれ、佐賀郡以東では明らかにヨミオンサツよりも敬意の低い言い方となる。身内の者や極く親しい者の動作についていうくだけた言い方とされるのである。田代地区も全様の傾向にある。

「なる」の訛つた形を含むヨミオйнаツ又はヨミナイオツは、東部地区と藤津郡⁴の一部に用いられる。ヨミオラスとヨミオンサツとの中間的なものである。（p.542）

佐賀県全域の方言敬語について説明されているが、その中でも今回対象とする西部地区での使用がみられているのは、「ヨマス」、「ヨミオйнаツ」、「ヨミンサツ」、「ヨミゴザル」の4つである。4つの表現を敬意度順にすると、ヨマス<ヨミオйнаツ<ヨミンサツ<ヨミゴザルと整理できる。最も敬意が高い表現が「ゴザル」であり、次いで「ンサル」、「ナツ」、「ス・サス」と続く。①で挙げられていた「ンシャル」、「ナル」、「ヤル」については言及がない。「ス・サス」については、唐津地区や西松浦地区では敬意を含むとするが、この敬意を含むとする地区も①と後述の③とは異なっている。

③『九州方言の基礎的研究』（1991）

九州方言の各県別解説の佐賀の章では、「ンサル」、「ゴザル」、「ナツ」、「ス」、「ッシャル」、の5つを敬意を加える表現とする。「ナツ」は、軽い敬意表現に用いる表現で、「ス」は対等以下に用いる軽視的親愛語としているが、対等以上にも用いる地区として、東松浦地区と伊万里地区を挙げる。

佐賀県東部西部地区とともに敬意を加えるのにンサル・ゴザルを用いる。活用はラ行五段に準じるが、命令形がンサイ・ゴザイとなる。ゴザルで表される敬意度は東部ほど低い。このほかにナツは「成る」に由来するもので軽い敬意表現に用いる。スは対等以下に

³ 昭和29年3月時点における西松浦地区とは、現在の伊万里市、有田町、武雄市の一部から形成されていた西松浦郡を指すと思われる。

⁴ 現在の多良町、嬉野市、鹿島市にあたる。

用いる軽視的親愛語である。「上がれ」に相当する語を敬意度に従って並べると、オアガンサイ・アガンサイ・アガイゴザイ・アガイナイ・アガライ・アガレとなる。スの命令形はなく「上がられ」に由来すると思われるアガライで代用する。

鳥栖地区ではゴザルも用いるが、よりていねいなのはイカッシャル・ヨマッシャルなど。スも用いるが、その命令形シはことにぞんざいがない方とされる。例、アガラシ上がれ。

東松浦地区ではゴザルは用いない。鳥栖地区と同じくシャルを用いる。スを佐賀地区ほど敬意度の低いものとせず、対等以上にも用いる。スのもつこの敬意度は伊万里地区にも及んで、時に誤解を生じることもある。例、センサーノコラシタ先生が来られた。

(p215)

以上の説明によると、挙げられている5つ表現のうち西部地区ではない地域での言及となった「ッシャル」を除いた4つの表現の敬意度は低い順に、「ス」<「ナッ」<「ゴザル」<「ンサル」となる。ここでも、「ンサル」の敬意度が最も高くなっており、「ス」については地区によって敬意度が異なることが示されている。

④塩川奈々美「九州北部地方における地域言語の動態に関する研究」(2022)

塩川(2017)は、シャル敬語の形式として「ンサル・ンサ(一)」のサ形と「ンシャル・ンシャ(一)」のシャ形があるとし、調査の結果、サ形とシャ形を併用する地域があることを明らかにした。また、2つを併用する地域の中でも小田・北方・塚崎ではシャ形よりサ形の方が敬意が高い表現とみなしているようだと述べる。

藤原(1978)では佐賀県下全域におけるサ形とシャ形について全域に盛んでであると記述されていたが、今回の調査の結果、サ形のみを用いるという地域とシャ形との併用が行われている地域が存在するという地域差を見出すことができた。特に、シャ形とサ形を併用する小田・北方・塚崎では、シャ形よりもサ形の方が敬意が高い表現であるとみなしており、言葉の形式のみならずそれに伴う敬意についても地域差を認めることができる。(p.104)

江北町(小田)、武雄市(北方・塚崎)、はいずれも佐賀県西部に該当し、この調査において、佐賀県西部では敬意度をシャ形<サ形と認識していることが確認できる。

①から④の先行研究によれば、佐賀県西部の方言敬語として、「ンシャル」・「ンサル」・「ナル」・「ス・サス」・「ヤル」・「ル・ラル」・「ゴザル」・「ナッ」の8つの形が存在しているようである。しかし、それぞれの形が表す敬意の度合いについては、先行研究間でも揺れが見られ、その使用実態について十分に明らかにされているとは言い難い。加えて、各調査からは

相当の時間経過が認められることから、先行研究が記述した当時の使用実態や「若い世代では用いられなくなっている」とされた形についても、その後の変化が生じていることが予想される。①から④の先行研究における課題をまとめ、以下に整理する。

- ・方言敬語のなかで「ンサル」を最も高い敬意を表す言葉としている。
- ・若い世代では「ンシャル」が命令形のみで用いられているとしている。
- ・「ス・サス」がどの程度の敬意を表す言葉として用いられているのか不明である。
- ・世代間で方言敬語の使用方法に差が見られるとあるがその詳しい実態が不明である。

本研究では、以上の課題を明らかにするために、佐賀県西部地区を対象とし、Microsoft Forms を用いたアンケート調査と対面での面接調査を行った。これにより佐賀県西部の現在の方言敬語の使用実態を明らかにしたい。

先行研究のなかで方言敬語の形を表す表現は様々であるが、本論文では以後、「ンシャル」、「ンサル」、「ナル」、「ス・サス」、「ヤル」、「ル・ラル」、「ゴザル」、「ナツ」に統一して表記するものとする。

4. 調査

4.1 調査方法

本研究では、Microsoft Forms を用いたアンケート調査と、対面による面接調査の2つの方法を用いて調査を実施した。Microsoft Forms を用いたアンケート調査は、不特定多数の回答者から比較的容易に回答を収集できるという利点を有する一方で、質問設計や回答形式の自由度に一定の制約がある。そこで、アンケート調査で得られた結果を補完し、より詳しい分析を行うために、対面での面接調査を併せて行うこととした。

方言敬語の使用実態を調査するにあたっては、回答者が自身の発話を円滑に想起できるような場面を設定することが重要である。20代以上の回答者にとって、職場で過ごす時間が長いことは容易に想像できるが、職業や就業形態は個人によって様々であり、共通の場面としての設定が困難である。そこで、Microsoft Forms を用いたアンケート調査においては、世代を問わず回答しやすいという点を重視し、学校を場面として設定した項目を多く設けた。また、Microsoft Forms を用いたアンケート調査ではその性質上、回答が選択肢に限定されるため、個々の細かい語感や絶妙なニュアンスを十分に把握することは困難である。この点を補うため、それぞれの回答者の実情に応じて質問内容を調整することができる面接調査を併用し、職場に焦点を当てた項目や、方言敬語に対する個人的な語感に関する質問を行った。これにより、方言敬語の使用実態をより詳しく明らかにすることを目指した。

4.2 Microsoft Forms を用いた調査

佐賀県西部での現在の方言敬語の使用実態を明らかにするために、多くの回答を得ることが期待できる Microsoft Forms を用いたアンケート調査を行った。

4.2.1 調査対象

調査の対象は、佐賀県西部（伊万里市・多久市・武雄市・嬉野市・鹿島市・有田町・大町町・江北町・白石町・太良町⁵）出身者で、5年以上の県外在住歴のない人とした。調査期間は、2025年9月～2025年12月である。

4.2.2 調査方法と調査項目

Microsoft Forms を用いたアンケート調査を行った。アンケート調査の項目は、全50問で、その内47問が方言敬語に関するものである。話し言葉の印象を問う項目、指定した会話の場面における括弧抜きの言葉を埋める項目を通して、回答者の方言敬語の使用の有無やどのような敬語を用いるのか、その敬語の使用方法を明らかにしようとした。他3問（(1)から(3)）は、回答者の年齢や出身地区を問うものであり、方言敬語の世代差を観察できると考えた。各調査項目における具体的な質問意図は以下の通りである。

- ①方言敬語使用の状況とその大まかな対象について明らかにする。… (4) (5) (49) (50)
- ②それぞれの方言敬語が持つ敬意の度合いについて明らかにする。… (6) ～ (23)
- ③それぞれの方言敬語がどのような意味として使用されているのかについて明らかにする。
… (24) ～ (28)
- ④第三者待遇における方言敬語の使用状況を明らかにする。… (29) ～ (36)
- ⑤使用されることが少ないと思われる複数の方言敬語の使用状況を明らかにする。
… (37) ～ (48)

実際のアンケート項目は以下の通りである。なお、「○」は選択肢の項目を示している。

I

- (4) 「先生が言いよんしゃった」「もうすぐ来らすよ」といった言葉を使いますか。
- 使う ○使っているのを聞いたことはあるが、自分は使わない
 - 聞いたこともない ○わからない
- (5) 「先生が○○って言いよんしゃった」という言葉は、会話の相手が誰であるときに使いますか。使うと思う相手を全て選択してください。(複数回答可)

⁵ ただし、今回の調査では太良町出身者からの回答は得ることができなかった。

- 父母 ○ 兄姉 ○ 弟妹 ○ 祖父母 ○ 親戚のおじ・おば
- いとこ ○ 県外に住んでいる親戚 ○ 先生 ○ 近所の人
- 全く使わない ○ その他（自由記述）

II 以下の文章を読み、適している（ご自身が使用する）と思うものを選択してください。

(6) ～ (8)

〈先輩〉〈担任の先生〉〈校長先生〉のそれぞれと話している場面で、
「これからどこに行くのか」とたずねます。

- どこに行きんさーとですか？ ○ どこに行きんしゃーとですか？
- どこに行かすとですか？ ○ どこに行きなーとですか？
- どこに行かれるのですか？ ○ どこに向かわれるのですか？

(9) ～ (23)

(6) ～ (8) のそれぞれの場面におけるすべての選択肢の言葉について、どのような印象を持ちますか。当てはまると思うものを全て選択してください。（複数回答可）

- 親しみ ○ 距離のある ○ 敬意がある ○ 敬意がない ○ 冷たい
- なれなれしい ○ 大げさな ○ その他

III 以下の文章を読み、()の部分に最も適していると思う言葉を、選択肢の中から選んでください。

(24) 先生が教室に向かって来ているのが見えた場面で、クラスメイトに向かって
「先生 こっちに () よ」

(25) 家庭訪問の場面で、あなたは、母親に先生が既に到着していることを伝えようとしています。「先生もう () よ」

(26) 部活動の場面で、友人に、今日は顧問の先生が来るのか聞こうとしています。
「先生、今日 () ?」

(27) 友人に先生がこちらに来るのを見たか、聞こうとしています。
「先生 () ?」

(28) 友人に先生がもう教室にいるのか聞こうとしています。
「先生もう () ?」

(24) ～ (28) の項目の選択肢は以下の通りである。

- 来よらず ○ 来んしゃった／来んさった ○ 来らず
- 来らした ○ 来よんしゃー／来よんさー ○ 来んしゃー／来んさー

(29) ～ (31)

〈A先生〉〈友人〉〈後輩〉のそれぞれを相手に会話しています。

B先生はいない、と伝えようとして、「B先生は ()」

- おんしゃれん／おんしゃらん ○ おらっさん ○ おんされん／おんさらん

- おんしゃなか ○おんさなか ○おらん
- おらっしゃれん／おらっしゃらん ○いない

(32) ~ (36)

〈お母さん〉〈お兄さん〉〈妹〉〈親戚の人〉〈後輩〉のそれぞれを相手に会話しています。
お父さんがもう家に帰っているのか聞こうとして、「お父さん、もう（ ）？」

- 帰っとんしゃー ○帰っとらす ○帰ってきちゃー
- 帰ってきてあー ○帰っとんさー ○帰ってきてる

IV 以下の言葉について質問に答えて下さい。

(37)・(39)

「早くきんしゃい」(早くおいで) / 「こっちにきやい」(こっちにおいで) という言葉を使いますか。

- 使う ○使わない ○聞いたことはある ○聞いたこともない

(38)・(40)

「使う」と答えた方に質問です。誰に対して使うか教えて下さい。(例：友人、弟など)

(41)・(43)・(45)・(47)

「どこにも行きなれん」(どこにも行かれない) /

「本ば読みおいごぎー／本ば読みよいごぎー」(本を読んでいる) /

「本ば読みおいなっ／本ば読みよいなっ」(本を読んでいる) /

「(あの人は) どっけ行かいた？」(どこに行ったのか) という言葉を使いますか。

- 使う ○使わない ○聞いたことがある ○聞いたこともない

(42)・(44)・(46)・(48)

(41)・(43)・(45)・(47) の言葉に敬意を感じますか。

- 感じる ○感じない

(49) どちらを使用するか答えて下さい。

- どこに行きんしゃーとですか？ ○どこに行くのですか？

(50) どちらを使用するか答えて下さい。

- どこに行きんしゃーとですか？ ○どこに行きんしゃー？

4.2.3 調査結果と分析

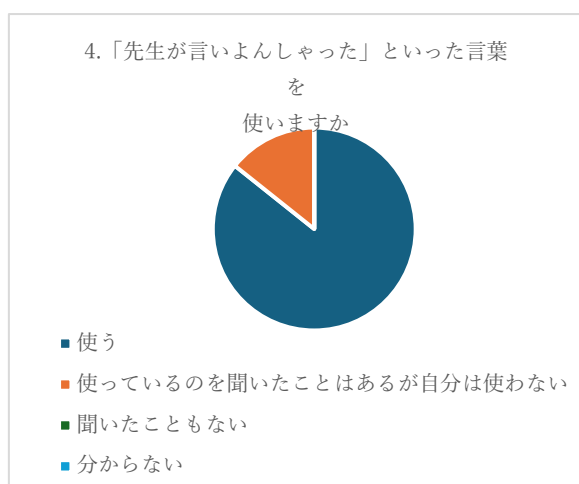
Microsoft Forms を用いたアンケート調査では、16 歳から 79 歳までの男女 81 名（男：36 名、女：45 名）から有効な回答が得られた。以下に質問意図ごとの調査の結果及び分析を示す。

①方言敬語使用の状況とその大まかな対象について明らかにする。

方言敬語を使用すると回答した人の割合は 8 割で、「使っているのを聞いたことはあるが、

自分は使わない」と回答した人を足すと 10 割となった【グラフ 1】。方言敬語か共通語の敬語かのどちらかを選ぶ項目においても、方言敬語の表現を選択した人の割合が 8 割近くであったことから、佐賀県西部において、方言敬語は現在でも年齢を問わず用いられていることが理解できる【グラフ 2】。

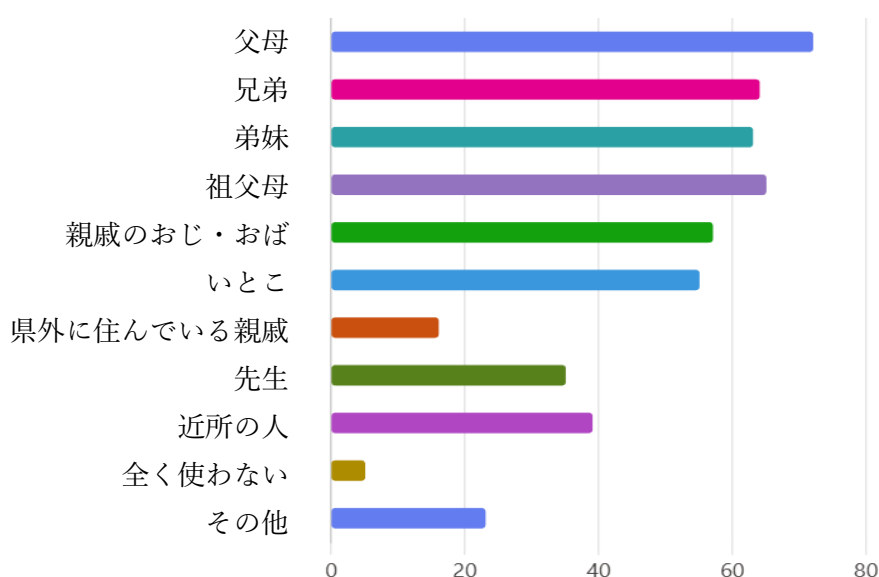
対象については、父母や兄弟、祖父母といった家族が最も多く、次いで近所の人、先生の順に並び、県外に住んでいる親戚が最も回答した人が少なかった。最も多かった家族を詳しくみると、父母が多く従妹が少ない結果となった【グラフ 3】。また、その他の回答として「友人」が寄せられ、その中でも「佐賀県在住の友人」や「同郷の友人」という回答があった。敬語の対象との親しさが方言敬語の使用条件の一つであることがわかる。また、方言全体に関して言えることではあるが、方言が通じないと思われる対象に対しては使用されていないようである。



【グラフ 1】



【グラフ 2】



【グラフ 3】

②それぞれの方言敬語が持つ敬意の度合いについて明らかにする。

敬意を表すべき対象として、「先輩」、「担任の先生」、「校長先生」を示した。当然、「先輩」<「担任の先生」<「校長先生」とより敬意を持つべき対象として認識されている。結果として、先輩に「ス・サス」を回答した人は48%であったのに対し、担任の先生では7%、校長先生では2%と高い敬意を表すべき対象になるにつれ「ス・サス」の使用は減少した。「ス・サス」は、現在使用されている方言敬語のなかで担う敬意の度合いが最も低いと考えられる。先行研究においては、佐賀県西部全域での使用が確認できなかった「ス・サス」であるが、今回の調査で西部地区全域での使用が確認された。「ス・サス」に関する回答の傾向は全世代で共通であったが、「ンサル」と「ンシャル」に関しては、世代間で差がみられた。

10代から20代の若年層において、担任の先生と校長先生とを比べると、担任の先生では「ンサル」を、校長先生では「ンシャル」が方言敬語の選択肢のなかではより多く回答されている【表1】⁶。【表1】の「ンサル」と「ンシャル」についてフィッシャーの正確確率検定⁷を行ったところ、有意な差が確認され、担任の先生より敬意を示すべき相手である校長先生に使われる「ンシャル」は、「ンサル」より敬意が高いと認識されていることがわかる。これは、「ンサル」が方言敬語としては最も高い敬意を表すとする先行研究とは異なる結果である。加えて、校長先生に「ンサル」を使用した場合、「ンシャル」を使用した場合よりも、敬意がないという印象を持った人が多かった。以上のことから、若い世代においては、「ス・サス」<「ンサル」<「ンシャル」の順で敬意度を意識して用いていることが理解できよう。

【表 1】

	「ス・サス」	「ンサル」	「ンシャル」	その他
担任の先生	15% (8)	45% (24)	21% (11)	19% (9)
校長先生	8% (4)	17% (9)	34% (18)	41% (21)

30代から40代において、担任の先生と校長先生とを比べると、担任の先生では「ンシャル」を、校長先生では「ンサル」が方言敬語の選択肢のなかではより多く回答されている【表2】。これは、「ンサル」が方言敬語としては最も高い敬意を表すとする先行研究と同じ結果である。しかし、両者の選択の割合にはあまり差が見られないことに留意するべきであろう。

50代以上において、担任の先生と校長先生とを比べると、担任の先生では「ンシャル」

⁶ 【表1】～【表3】の「その他」は、特記した三つの方言敬語以外の選択肢（標準語敬語を含む）からなる。

⁷ 2×2分割表の2変数の間に統計学的に有意な関連があるかどうかを検討するのに用いられる検定法のこと。

を、校長先生では「ンサル」が方言敬語の選択肢のなかではより多く回答されている【表3】。これは、30代から40代と同じ結果であり、「ンサル」が方言敬語としては最も高い敬意を表すとする先行研究に矛盾しない。ただし、特に70代の回答者においては校長先生に対して方言敬語を使用した選択肢を選んだ者は1名のみであり、印象を尋ねる項目においても、方言敬語は「敬意がない」と感じられがちであった。「校長先生」という存在が、方言を使用できないほど敬意が高い相手であると認識されていたのであろう。

30代以上の世代においては、「ス・サス」<「ンシャル」<「ンサル」の順で敬意度が意識されていることがわかった。世代間でどの形を最も敬意が高いとするかについての差はあるものの、どの世代であっても、方言敬語には段階があり、対象によって使い分けていることが推察される。

【表2】

	「ス・サス」	「ンサル」	「ンシャル」	その他
担任の先生	0	36.4% (4)	54.5% (6)	9.1% (1)
校長先生	0	54.5% (6)	27.3% (3)	18.2% (2)

【表3】

	「ス・サス」	「ンサル」	「ンシャル」	その他
担任の先生	0	56% (10)	33% (6)	38% (2)
校長先生	0	39% (7)	11% (2)	50% (9)

③それぞれの方言敬語がどのような意味として使用されているのかについて明らかにする。

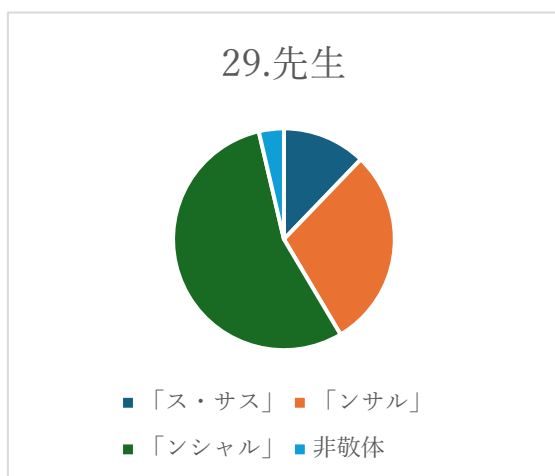
「来よらす」・「来よんしゃー」は、動作主がまだ目的地に到着してはいないものの、向かって来ていることがわかっている時、つまり、動作が進行中の状態を表している。アンケート項目(24)・(27)の条件のなかで、動作の進行を表す役割を担っている。目的地に既に到着しており、動作が完了している場面(25)・(28)では、「来らした」・「来んしゃった」を用いる。「来らす」・「来んしゃー」は、姿の見えない人が来るのか来ないのかたずねる場面(26)で選択されており、その事態が未だ起きていないことを示す意味を含んでいるといえる。佐賀県西部の方言話者は、敬意の程度だけでなく、状況に合わせてどの方言敬語が適当か判断し使用していることがわかる。

④第三者待遇における方言敬語の使用状況を明らかにする。

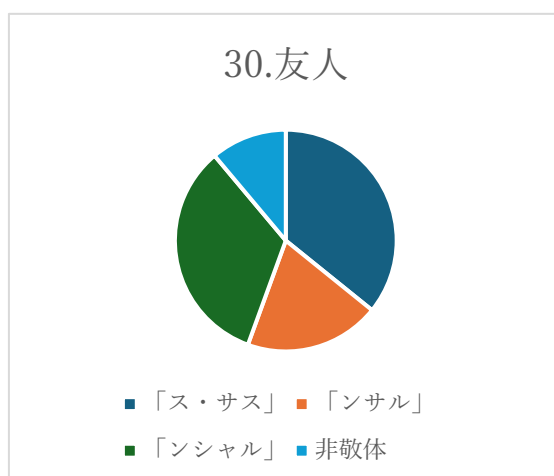
聞き手が、先生であっても、友人であっても、後輩であっても、家族であっても、左右されることなく、方言敬語を用いて会話していることがわかる【グラフ4・5・6・7⁸】。佐

⁸ 非敬体には、共通語の非敬体と方言の非敬体の双方を含んでいる。

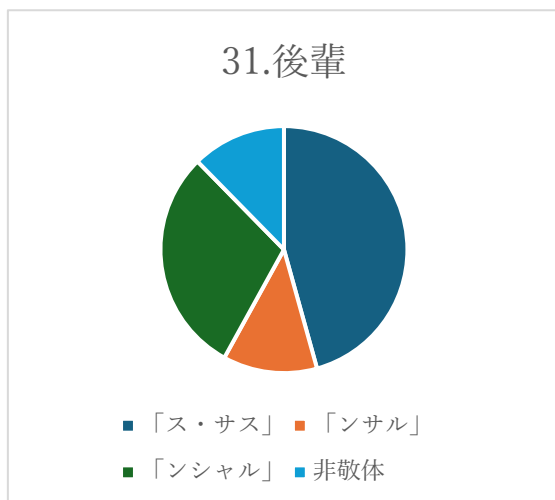
賀県西部では、第三者待遇場面において、どの世代においても共通して、話し相手の違いにかかわらず方言敬語が使用される傾向にあるといる。ただし、使用する方言敬語は、10代から20代で相手が先生であれば「ンシャル」の方が多く、友人や後輩では、「ンサル」の方が多くなっている。また、30代以上では、相手が先生であれば「ンサル」の方が多く、友人や後輩では、「ス・サス」「ンシャル」の方が多くなっている。ここでも、②で示した「ンサル」<「ンシャル」または、「ス・サス」・「ンシャル」<「ンサル」の敬意の程度の差が守られていることがわかる。



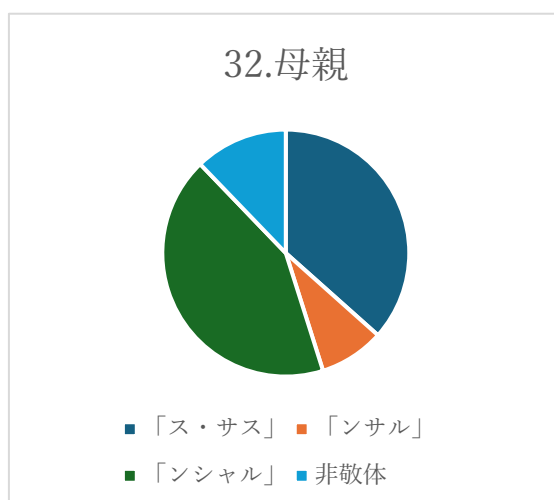
【グラフ4】



【グラフ5】



【グラフ6】



【グラフ7】

⑤使用されることが少ないと思われる複数の方言敬語の使用状況を明らかにする。

「ナル」と「ゴザル」は使うと回答した人がおらず、聞いたこともないも含めて70%をしめた【グラフ8】・【グラフ9】。よって、年齢層問わず「ナル」と「ゴザル」に現在の使用実態はないと結論づけた。

「ナッ」を使うと回答した人は、4名でありいずれも20代の回答者であった。しかし、

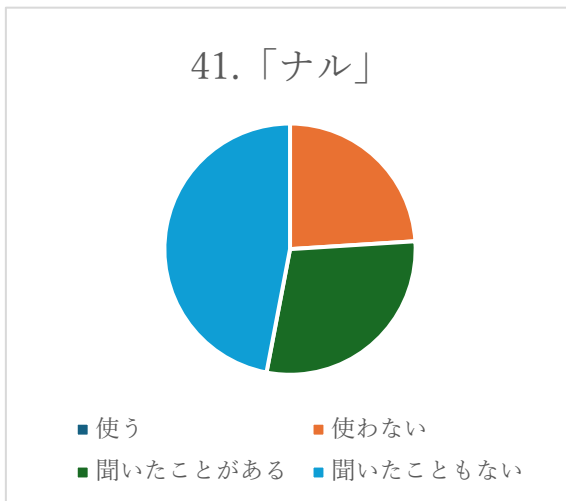
この回答者で「ナッ」に敬意を感じると答えた者はおらず、敬語としては認識せずに使用していることがわかった【グラフ 10】。

「ル・ラル」は約 7 割の回答者が「使う／聞いたことがある」と答え、若年層にも使用されている【グラフ 11】。ただし、10 代から 20 代の回答者のうち、「使う／聞いたことがある」と回答した 34 名で、「敬意がある」と感じて使用している者は約 18%であり、敬語としての機能を留めているか疑問に残る結果となった。その一方で、30 代から 50 代の回答者で使う「使う／聞いたことがある」と回答した 11 名のうち、「敬意がある」と認識している者は約 64%、60 代から 70 代の回答者で「使う／聞いたことがある」と回答した 11 名のうち、「敬意がある」と認識している者は約 90%と、10 代から 20 代の状況とは大きく異なっている【表 4】。

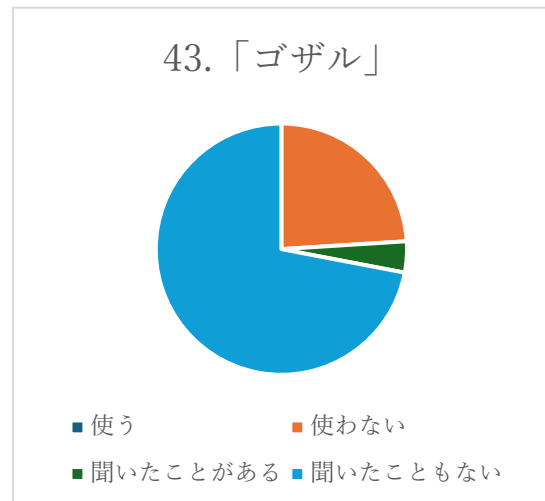
先行研究で紹介されていた「ナル」、「ゴザル」、「ナッ」について、今回の調査では敬意を感じないと回答する割合が高く、本来持っていた言葉としての役割が失われているようである。また、「ル・ラル」についても、10 代から 20 代の若い世代では、敬意を表すという役割を失いつつあることがわかった。

【表 4】

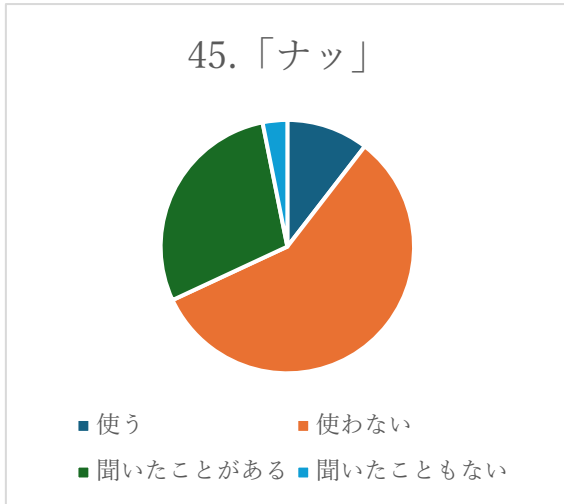
「使う／聞いたことがある」と回答	敬意を感じる	敬意を感じない
10 代～20 代 (34 名)	6 (17.6%)	28 (82.4%)
30 代～40 代 (5 名)	4 (80%)	1 (20%)
50 代 (6 名)	3 (50%)	3 (50%)
60 代～70 代 (11 名)	10 (90.9%)	1 (9.1%)



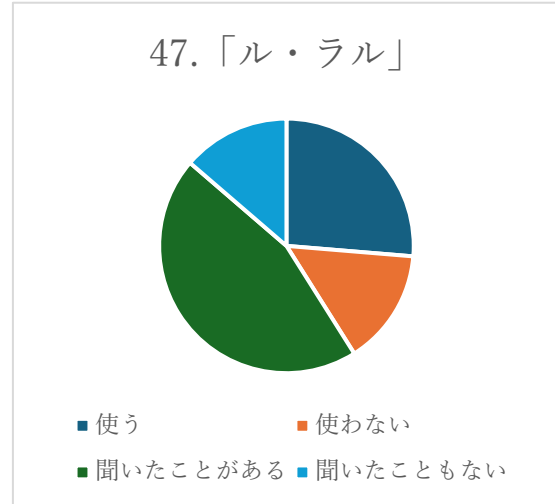
【グラフ 8】



【グラフ 9】

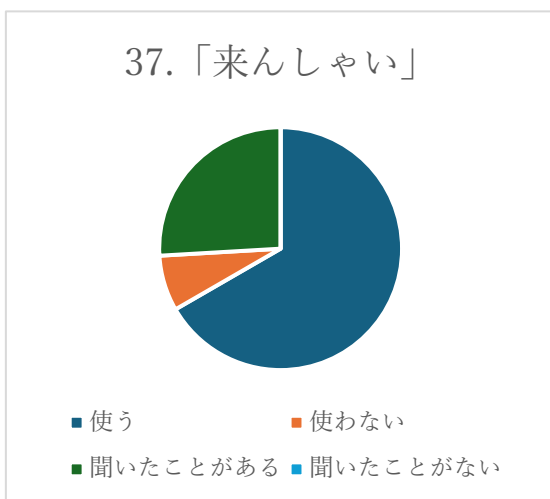


【グラフ 10】

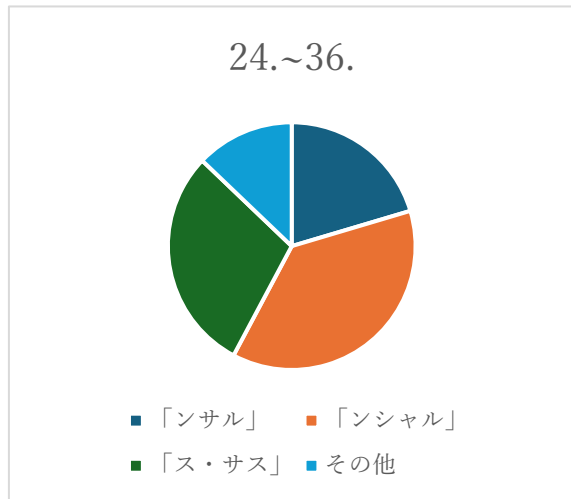


【グラフ 11】

「ンシャル」について、『佐賀県のことば』においては、「若い世代では、クンシャイ（ちようだい）のように、命令形だけがよく使われるようになっている」（p13）とあり、命令形以外の使用が少なくなっている様子が説明されていた。今回の調査でも、命令形の「キンシャイ（来なさい）」の使用の有無を問うた項目（37）で、「使う・聞いたことがある」と答えた人は75%であり、命令形での使用が認められる【グラフ 12】。しかし、今回の調査ではどの項目の回答にも「ンシャル」がみられ、命令形だけがよく使われているとはいえない。むしろ、10代から20代の若年層においては、方言敬語の形の中で最も使用されていることが確認できた【グラフ 13】。



【グラフ 12】



【グラフ 13】

ここまで、質問意図ごとの結果を述べてきたが、次に、「ンサル」と「ンシャル」の使用を特筆すべき点としてあげ、分析を行う。

【「ンサル」と「ンシャル」について】

②より、敬意度の認識について世代差がみられた「ンサル」と「ンシャル」であるが、敬意度の他に、使用頻度にも世代差が見られた。【表5】⁹は、12個の項目における、「ンサル」形が選択された回数と「ンシャル」形が選択された回数を、10代・20代の回答者と30代以上の回答者とで分けて示したものである。【表5】の通り、10代と20代において、「ンシャル」形の選択肢の回答率が高く、「ンサル」形の回答率が低い、逆に、30代以上では「ンシャル」形の回答率が低く、「ンサル」形の選択肢の回答率が高い、という結果が得られた。

【表5】

	「ンサル」	「ンシャル」
10代・20代 (52名)	62 (30.5%)	332 (89.2%)
30代～70代 (29名)	141 (69.5%)	40 (10.8%)
合計 (81名)	203 (100%)	372 (100%)

先行研究や今回のアンケート調査の結果が示す通り、「ンサル」は、30代以上の話者にとって、高い敬意を表すことのできる言葉であると認識される一方で、「ンシャル」は使用されにくい言葉であった。しかし、10代から20代の話者では、使用されにくい言葉であった「ンシャル」の使用頻度が上昇し、他方、30代以上の話者で敬意が高いとされた「ンサル」の使用頻度は減少している。更に、「ンシャル」をより高い敬意を表す言葉として認識している。

「ンサル」と「ンシャル」の敬意度の逆転とみることのできるこの現象は、「ンサル」の敬意の逡減によるものであると考えることができる。先行研究に示される通り、「ンサル」は、もともと高い敬意を表す形であった。しかし、【表5】の30代から70代の「ンサル」形の使用率からもわかるように、より多くの話者に、より多くの場面で選択され、使用範囲が拡大していったと考えられる。その結果、敬意の強度が相対的に低下し、現在の若年層においては、もはや高い敬意を表すとは捉えられなくなっているのである。以上の「ンサル」の敬意の逡減により、「ンシャル」の出現を説明することができる。敬意が低下した「ンサル」の代わりとなる表現が求められた結果、もともと方言敬語の形式の一つとして存在していた「ンシャル」が再び用いられるようになったと考えられるのである。

「ンシャル」をより高い敬意を表すことのできる言葉として用いられるようになった10代から20代の若年層において、さらに「ンサル」の使用頻度の減少が生じている。若年層では、親や兄弟、親戚の人、先輩、後輩、先生といった一般に敬意度が同じでないと考えられる幅広い対象に対して、「ンシャル」が選ばれることが多い。また、52名の回答者のうち14名がすべての質問で一貫して「ンシャル」を選んでいった。一貫して「ンシャル」を使用していたり、一般に先生と後輩といった表すべき敬意に差があるとされる対象に対して同じ「ンシ

⁹ 項目24から36の結果から集計

「ンシャル」を使用していたりする話者の存在が確認されたことから、「ンシャル」がどの対象者に対しても使用できる汎用性の高い方言敬語として認識されつつあり、本来、形ごとで表すことのできる敬意度が異なることで存在していた方言敬語による敬意の段階が単純化されつつあると考えることができる。

Microsoft forms のアンケート調査では以下のことが明らかとなった。

- ① 佐賀県西部において、方言敬語は現在でも年代問わず使用されている。
- ② 現在佐賀県西部で使用実態がある形は、「ス・サス」、「ンサル」、「ンシャル」、「ル・ラル」の4つである。
- ③ 「ンシャル」は命令形のみよく使用される」という実態はみられない。
- ④ どの言葉がより高い敬意を持っているのかの認識において、世代差がある。
 - ・10代から20代では、「ンシャル」を最も高い敬意を持つ言葉として認識している。
 - ・30代以上の世代では、「ンサル」を最も高い敬意を持つ言葉として認識している。
- ⑤ 「ンサル」と「ンシャル」の使用頻度について、世代差がある。
 - ・10代から20代では、「ンシャル」がよく用いられ、「ンサル」はあまり用いられない。
 - ・30代以上の世代では、「ンサル」がよく用いられ、「ンシャル」はあまり用いられない。
- ⑥ 若年層における「ンサル」と「ンシャル」の敬意度の逆転は、「ンサル」の敬意の逡減により、より高い敬意を表現できる言葉として「ンシャル」が求められた結果である。
- ⑦ 方言敬語は、「ンシャル」が汎用性の高い言葉として認識されつつあり、その敬意の段階が単純化されつつある。

4.3 面接調査

全年代で回答しやすいことを目指し、アンケート項目を設定した Microsoft Forms を用いた調査であったが、面接調査では、回答者の実情に合わせて掘り下げた質問を行った。面接調査を行うことで方言敬語の使用実態についてより詳細な分析が可能になった。

4.3.1 調査対象と方法

調査対象は、佐賀県西部出身で、5年以上の県外在住歴のない10代から70代の武雄市出身の10代女性、20代（2名）、伊万里市出身の30代、白石町在住の40代、武雄市在住の50代、60代、70代（2名）の計9名である。調査期間は、2025年12月～2026年1月であり、調査の方法は、対面による会話と質問項目に答えてもらう形をとった。以下にインフォマンントの詳細を提示する。

番号	生育地	生年（年齢 ¹⁰ ）	性別	職業 ¹¹
①	武雄市北方町	H20年（18）	女	なし
②	武雄市若木町	H15年（22）	女	アルバイト（教育・飲食）
③	武雄市武雄町	H10年（27）	女	会社員（長崎県）
④	伊万里市立花町	S63年（38）	男	高校教員
⑤	杵島郡白石町	S56年（45）	男	建築会社勤務
⑥	武雄市北方町	S45年（55）	女	小学校教員
⑦	嬉野市嬉野町	S32年（68）	男	なし
⑧	鹿島市浜町	S26年（74）	男	服飾会社勤務
⑨	武雄市山内町	S22年（78）	女	ピアノ講師

4.3.2 調査項目

各調査項目は、アンケート調査の項目を補完するものであるが、ペットに対する使用を聞いた項目 iv は、アンケート調査の結果を受けて追加したものである。アンケート調査の質問（38）では、「来んしゃい」を使う対象を調査したが、そのなかで、3名が「犬」、「猫」、「ペット」と答えた。しかし、この3名の動物に対する「ンシャル」の使用が敬意を表すものであるかは不明であった。そこで、面接調査において、ペット（人以外）に対する方言敬語の使用を調査する項目を設けることとした。面接調査を実施するにあたって、回答者の実情に応じて質問の仕方に若干違いを生じさせた。また、30代以上の回答者には調査項目 v を設けた。各調査項目における質問意図は以下の通りである。

- ㊦ 職場での使用実態について明らかにする。
- ㊧ 方言敬語の語感による使い分けについて明らかにする。
- ㊨ 誰にどの程度の敬意を表そうとして方言敬語を用いているのかについて詳しく探る。
- ㊩ ペット（人以外）に方言敬語を用いるか否かについて明らかにする。

以下に具体的な調査項目を示す。

i 職場での使用について

- (1) 職場で同僚¹²と会話するとき、方言敬語を使用しますか。
- (2) どのような場面での使用ですか。

¹⁰ 2026年1月時点

¹¹ 退職前の職業を含む。

¹² 上司や部下を含む。ここでは職場の人の意味。

- 〔3〕 職場で利用者¹³と接するとき、方言敬語を使用しますか。
- 〔4〕 どのような場面での使用ですか。
- ii 方言敬語と共通語の敬語の使用場面について
- 〔5〕 方言敬語はどんな時に使用していますか。
- 〔6〕 標準語の敬語はどんな時に使用していますか。
- 〔7〕 友達（又は家族）に標準語の敬語を使われたとしたら、どんな感じがしますか。
- 〔8〕 自分が標準語の敬語を使うときは、どんな感じがしますか。
- iii 「ンサル」、「ンシャル」、「ス・サス」について
- 〔9〕 「来んさー」を使うのはどんな時ですか。
- 〔10〕 「来んしゃー」を使うのはどんな時ですか。
- 〔11〕 「来らす」を使うのはどんな時ですか。敬意が高いと思う順に並べて下さい。
- 〔12〕 両親／兄弟／先生／上司に対して敬語を使いますか。
- iv ペットに対する方言敬語の使用について
- 〔13〕 ペットなど、人以外に対して「来んしゃい」のような言葉を使いますか。
- 〔14〕 （回答した形以外の方言敬語の形を示して）この言葉は使いませんか。
- v 30代以上の回答者への追加調査
- 〔15〕 あなたが学生のころは、どのような方言敬語を使用していましたか。
- 〔16〕 あなたの両親や祖父母は、どのような敬語を使用していましたか。

4.3.3 調査結果と分析

面接調査の結果と分析を項目ごとに示す。

〈項目 i について〉

職場での使用について、9名のうち7名から回答が得られた¹⁴。このうち同僚または利用者
と接する場面で、方言敬語を使用するとしたのは6名であり、学校教育の場を離れ、社会
に出た後においても、方言敬語は一定の場面で使用され続けているといえる。

使用場面について、同僚に対しては、「仕事のことに話している時は使わないが、
雑談寄りの話であれば使う（⑥）」、利用者に対しては、「休み時間やホームルーム、部活の

¹³ 飲食業界という客のこと。生徒や社外の取引相手など。

¹⁴ 回答が得られなかった①と⑦はいずれも職歴がない。

時間で使う (④)」、「会議では使わないが、会議の後時間でかつ先方が使っていれば一緒に使う (⑤)」などの回答があった。方言敬語は、上記の⑥・④・⑤のように、非公式な場で選択されるものの、公式な場では回避される傾向がみられ、話者ごとに一定の使用基準が存在することがうかがえる。ただし、方言敬語を使用している回答者の職場環境を聞くと、県内出身者が大半であるか、職場の全員が県内出身者であることが多く、一方で、使用しないとした③は、県外在住であり、職場にも佐賀西部出身者がいないことがわかった。「方言が無理なく通じる」との認識できる環境では方言敬語に限らず、方言自体が盛んに用いられているようである。

〈項目 ii について〉

方言敬語の使用場面で多くあげられたのは、アンケート調査①と同じく「家族との日常会話」や「友人との会話」、「近所の人との会話」である。対して、共通語の使用場面については、「大学受験の面接 (①)」、「大学での発表 (②)」、「仕事の間 (⑥)」など、公共の場が多くあげられた。

方言敬語の使用場面について、①と②は「(学校の先生について) 担任や顧問の先生には方言敬語で話すが、日ごろ関りのない先生には使わない」、⑤は、「長年関りのある顧客に対しては使用するが、新規の顧客に対して使用することはない。」と回答した。①と②は敬意を向ける対象として「先生」、⑤は「顧客」と、同じ立場の相手を対象としているが、一方には方言敬語を用い、他方には用いないと明確に区別している。この場合、相手の立場ではなく、その相手との親しきで方言敬語の使用の有無を決定しているのだろう。また、〔8〕の質問に対し、「親しくなったゼミの教授に方言敬語を使えないことがもどかしい。本当は使いたい。(②)」との回答があった。詳しく聞くと、「実際に会話で使用する標準語の敬語では、教授に対し距離を置いているような言い方になってしまう」と述べた。同じような回答は⑥からも得られた¹⁵。共通語の敬語では、親密な関係が形成されているにもかかわらず、その事実を反映できていない感覚に陥り心理的距離を感じてしまうのだと推察できる。共通語の敬語の語感についても触れることとなったが、以上より、対象との親しさが方言敬語の使用の条件の一つと考えられる。

併せて、質問〔6〕で次の点を再確認することができた。すなわち、60代以上の世代において、校長先生は方言敬語を使用する対象ではないという点である。⑦・⑧・⑨は、校長先生に対して共通語の敬語のみを使い、方言敬語は使わない、あるいは使うのはおかしいとした。その理由について、⑧は、「校長先生といった先生方に方言敬語を用いることは失礼にあたる、と学校で教えられた。標準語の敬語でないと敬意を表すことができない。」と述べ、⑨は、「方言敬語では十分な敬意を表すことができないと感じる。よって、たとえ校長先生と親しい関係であっても、方言敬語を用いることはない。」と述べた。アンケート調査の結

¹⁵ 【資料】に項目 ii-3 として示している。

果をみても、60代以上の世代において校長先生に対して方言敬語が選択した回答者は少なく、以上より、この世代において、校長先生は方言敬語を使えないほど高い敬意を示すべき対象として認識されていること、共通語の敬語が方言敬語よりも高い敬意を示す言葉として認識されていることが理解できる。

〈項目 iii について〉

方言敬語の持つ語感について、面白い結果が得られた。「ンサル」と「ンシャル」について、「ンシャル」は言葉数が多く、また柔らかい音で聞こえるためより高い敬意を表しているように感じる。他方、「ンサル」は短い言葉で粗雑に聞こえる、と10代の①が述べたのに対し、50代の⑥と60代の⑦は「ンシャル」が敬語としては粗雑に聞こえると述べたのである。①は、「ンシャル」の語感がより上品であると考え、敬意が高いとみなしているようである。⑥と⑦については、先行研究で「ンサルの転じたもの」(佐賀県のことば)とあるように、「ンシャル」は「ンサル」の転化した形であるという「ンシャル」の成り立ちが語感に影響していると推測できる。10代の回答者が「ンサル」を粗雑と感じ、50代と60代の回答者が「ンシャル」の方を粗雑と感じているという、「感じ」の捉え方の違いは、「ンサル」と「ンシャル」の敬意度に関する世代間の対立と矛盾しない。

項目 iii の質問により、アンケート調査の分析から得られた「ンサル」と「ンシャル」に関する世代間の違いを補強する結果も得られた。

10代と20代にあたる、①・②・③によれば、「ス・サス」と「ンサル」と「ンシャル」を敬意度順に並べると、「ス・サス」<「ンサル」<「ンシャル」であるが、「ンサル」と「ンシャル」には差をあまり感じず、さらに「ンサル」は日常であまり用いていない。他方、⑤から⑨の5人によれば、上記の三つの形を敬意度順に並べると、「ス・サス」<「ンシャル」<「ンサル」であり、「ンシャル」はあまり用いていない。(例外的に④は、「ンサル」より「ンシャル」のほうが敬意の高い形であると感じるが、よく用いているのは「ンサル」であると回答した¹⁶。)これは、アンケート調査の分析を支持する結果であろう。

次に、質問〔15〕において、①から④の4人は、両親や兄弟に敬語を「使わない」と答えた。しかし①から④は、両親や兄弟と対する場面で、「ンシャル」をよく使用すると答えている。質問〔15〕で①は以下のように答えた。

(母親に父親が帰ってくるか聞く場面の)「今日帰って来んしゃー？」や、(妹が何をしているのか兄に聞く場面の)「なんばしよんしゃーと？」と話す時、「来んしゃー」や「しよんしゃー」に敬意を含ませているとは思わない、敬語のつもりで話してはいない。

¹⁶ ④はこのことに関して、項目 v と合わせて自己分析を行っていた。項目 iii-1 として別途【資料】に示す。

②・③・④も、同じく「敬語のつもりではない」と答えた。この回答から家族との場面において、方言敬語を使用しつつも、敬語を使っているという認識を持っていないことがわかる。方言敬語が形式的には敬意を含んでいても、敬語を使用しているという認識を持たないまま使用している実態が観察された。この場合、敬意ではなく親愛を表す言葉として「ンシャル」を用いていると考えられる。他方、⑤から⑨は、両親や兄弟に敬語を「使う」と答えた。両親や兄弟に対して使用する場面でも、方言敬語は敬意を表すために用いられている。家族であっても、対象が目上であれば敬語を使用するべきであるという意識は、家父長制の影響であろう。⑤・⑥・⑧・⑨の幼少期には、家父長制の影響を大いに受けていたと考えられる戦前生まれの家族が同居していたことがわかっており、家族内において祖父や父親の立場が比較的強固なものであったと考えられる。また、「男は外、女は内」といった価値観が根強く残っていたとも考えられ、40代以上の話者の幼少期と現代とで家庭環境が大いに異なっていることは容易に推察される。このような違いが、方言敬語を敬語として両親や兄弟に用いるか否かの差につながっていると考えられることができる。

〈項目 iv について〉

ペットについて特筆すべき回答が得られたのは、②と④の二人である。以下に得られた用例を示す。

・「ハヨ コッチ キンシャイ。」 (はやくこっちに来なさい。)

②がペットの犬に対し、話し手側に来るよう呼びつけている場面。

・「ヨカモン タベヨンサーネ。」 (いい物を食べているようだね。)

④がペットのうさぎが普段は与えない珍しい餌を食べているところを目撃した場面。

一般的に敬意の対象とならない犬やうさぎといったペットに対して、②は「ンシャル」の、④は「ンサル」の使用が確認された。しかし、双方とも「(ペットに対し) 敬意はない」と答えた。また④は、「ンサル」の部分が「ンシャル」になっても使い方として問題ないが、自分は使用しないと答えた。

②は、面接調査の結果、どの立場の人であっても「ンシャル」のみを使用することが明らかになった。よって、【「ンサル」と「ンシャル」について】でも述べたように、「ンシャル」を場面および会話の相手の違いにかかわらず用いることのできる汎用性の高い言葉として使用していると考えられる。

以上のような②や④のペットに対する使用の実態や項目 iii における①から④の使用実態から分かる通り、方言敬語を親愛の言葉として用いている人が一定数いることが確認された。このような話者は方言敬語を、その使用法から見られる、身分や地位、年齢といった上

下関係によって選ぶ用法と、親疎関係によって選ぶ用法のうち、親疎関係による用法を重視し、使用しているものと考えられる。すなわち、身分の上下ではなく、共通語との比較において、「心理的に遠い距離ではない」、「親しい」を表す言葉として使用しているのである。現代日本語の敬語で起こりつつある、地位の上下による使い分けから、親疎による使い分けへの進化について、井上・金・松田（2012）は、以下のように述べている。

現代日本語の敬語は、様々な面で変化を重ねている。そのうちのかなりが長期間にわたる歴史的变化の現代的局面と位置づけられる。（中略）上下敬語から左右敬語へ、身分敬語から役割敬語へ、地位敬語から商業敬語へ、力（権力）power から親疎 solidarity へ（Brown and Gilman 1960）、縦社会から横社会へ、敬意から心理的距離へ、ウエシタからウチソトへ。

これらは、封建的固定的身分制度によって敬語が生じたという世界史的視点からみて、それと対立させる形で「民主化・平等化」と呼べる。近代の「四民平等」などのかけ声は、敬語の変容に効果がなかった。戦後民主主義の遅ればせの浸透と一致して進行した現象とみられる。（pp.1-2）

ここでは以上の見方によって、岡崎の方言の変化が説明されているが、この岡崎の方言の変化は、岡崎という地区だけに限定されるものではないとする。日本語全体における敬語の変化の流れの中に岡崎の方言の変化もあるのである。従来の、相手の地位によって使用する敬語を選ぶ、という基準から、親疎関係によって使い分けるという基準が多用されるようになっていくという、日本語の敬語全体の変化が、佐賀県西部の方言敬語にも及び始めている。自分中心であり、自分と心理的に近い距離にあるか否かという、自らとの親しさで方言敬語を選ぶという新しい基準が 10 代から 20 代の若年層を中心に適用されつつある。

〈項目 v について〉

回答者の両親や祖父母の敬語の使用法をたずねたが、⑥と⑦と⑨から「父親または祖父が「ンシャル」を話しているところをみたことがない」という回答が得られた。今回の調査では、どの世代においても「ンシャル」の使用実態が確認されたことから、女性語であるといった事実は確認されない。男性には使われていなかった言葉が、時代が下るにつれ性別を問わず使用されるようになったことがうかがえるが、本論文では調査数が少なく詳しい分析には至らなかった。そのため、項目 v に関しては紹介するのみにとどめる。

5. おわりに

本研究では、佐賀県西部における方言敬語の使用実態を明らかにすることを目的として、Microsoft forms を用いたアンケート調査と、面接調査を実施し、分析を行った。その結果

で特筆すべきものを以下に示す。

- ・現在佐賀県西部で使用実態がある形は、「ス・サス」、「ンサル」、「ンシャル」、「ル・ラル」の4つである。
- ・どの言葉がより高い敬意を持っているのかの認識において、世代差があり、10代から20代では、「ンシャル」を最も高い敬意を持つ言葉として認識している一方、30代以上の世代では、「ンサル」を最も高い敬意を持つ言葉として認識している。
- ・「ンサル」と「ンシャル」の使用頻度についても、世代差があり、10代から20代では、「ンシャル」がよく用いられ、「ンサル」はあまり用いられない。一方、30代以上の世代では、「ンサル」がよく用いられ、「ンシャル」はあまり用いられない。
- ・敬意が高い言葉として用いられていた「ンサル」は、敬意が逡減し、その「ンサル」の地位を「ンシャル」が占めるようになってきている。
- ・「ンシャル」は汎用性の高い方言敬語として認識されつつある。
- ・「ンシャル」は、話者自身との親しさを表す親愛の言葉として用いられるようになってきている。

以上の調査結果により、佐賀県西部における方言敬語の使用実態について先行研究から変化が見られることが確認できた。特に、10代から20代の若年層においては、「ンサル」の使用頻度の減少と、それに対して「ンシャル」の使用頻度の上昇が確認され、なおかつ、「ンサル」より、「ンシャル」の方が高い敬意を表すという、先行研究とは異なる使用実態が明らかとなった。

また、「ンシャル」について、敬意の意味を含ませないとしつつも使用されている実態や、ペットに対する使用実態が確認され、親愛的意味を持つ言葉として使用している人が一定数存在することが確認された。今後、「ンサル」の使用頻度がさらに減少していくなかで、「ンシャル」が親愛の意味を含め、汎用性の高い言葉として多くの話者に認識されるようになると考えられる。共通語の敬語であれば通常、敬語を正しく使用できていなかった場合であっても、学校での経験や就職活動、さらには就職時の研修等を通して、相手の立場によって敬語を使い分けることを学び、敬語の使用方法が規制される。しかし、方言敬語は、方言であるという特性上、地元が同じであったり親族であったりという親しい間柄でのみ用いられる。よって、共通語のような規制の機会を得ることができないまま使用され続け、若年層が現在習得している「ンシャル」の使用法は、この層の年齢が上がってもそのまま継続することが予想される。今後、親愛の意味を含んだ汎用性の高い言葉としての「ンシャル」使用の拡大がおこると考えられるが、今後のさらなる観察と検討が必要である。

先行研究における調査から減少していることが確認された佐賀県西部における方言敬語の形態は、「ンサル」が廃れ、「ンシャル」に意味機能が包括されることで、さらに減少し、「ンシャル」に収束していくと思われる。佐賀県西部における今後の方言敬語の動向に注目

したい。

【謝辞】

本研究の趣旨を理解し、快く協力していただいた調査対象者の皆様に心より感謝申し上げます。

5. 参考文献

- ・Brown, Roger and Albert Gilman (1960) 「The pronouns of power and solidarity.」, Thomas A. Sebeok (ed.) 『Style in language』, pp. 350-377, Cambridge: MIT.
- ・井上史雄 (1999) 『日本列島方言叢書 九州方言考』, ゆまに書房
- ・井上史雄(2007) 『変わる方言 動く標準語』, 筑摩書房
- ・井上史雄・金順任・松田謙次郎 (2012) 「岡崎 100 年間の「ていただく」増加傾向—受惠表現にみる敬語の民主化—」『国立国語研究所論集』, 4, pp.1-25,国立国語研究所
- ・上村孝二(1983) 「1 九州方言の概説」『講座方言学 9：九州地方の方言』, pp.1-28, 国書刊行会
- ・大城玲奈 (2015) 「視点と言語表現—移動動詞『行く/来る』の使い分けについて—」『東京女子大学言語文化研究』 23, pp.36-51
- ・小野志真男(1983) 「佐賀県の方言」『講座方言学 9：九州地方の方言』, 国書刊行会
- ・加藤正信 (1973) 「階層と敬語」『敬語講座 6 現代の敬語』, 明治書院
- ・九州方言学会 (編) (1969) 『九州方言の基礎的研究』, 風間書房
- ・九州方言学会 (編) (1991) 『九州方言の基礎的研究 改訂版』, 風間書房
- ・工藤真由美 (1999) 「西日本諸方言におけるアスペクト対立の動態」『阪大日本語研究』 11, pp.1-17, 大阪大学文学部日本語学講座
- ・佐賀県教育委員会 (2023) 『佐賀を「知る」、「発見する」、「好きになる」佐賀巡り』, 福博印刷株式会社
- ・佐賀県教育会 (編) (1975) 『佐賀県方言辞典』, 国書刊行会
- ・塩川奈々美 (2014) 「福岡県筑豊地区における方言敬語の記述的研究：飯塚市と田川市にみるシャルの性質」『徳島大学国語国文学』 27, 徳島大学国語国文学会
- ・塩川奈々美 (2017) 「シャル敬語の地理的・世代的分布：長崎街道グロットグラム調査を通じて」日本方言学会 (編) 『方言の研究』, pp.291-316,ひつじ書房
- ・塩川奈々美 (2022) 「九州北部地方における地域言語の動態に関する研究」, 徳島大学博士論文
- ・志津田藤四郎 (1972) 『佐賀の方言 下巻 総説編』, 佐賀新聞社
- ・陣内正敬 (1996) 『北部九州における方言新語研究』, 九州大学出版会
- ・辻加代子・井上史雄・柳村裕 (2016) 「岡崎における第三者敬語の位置づけ：「第三者尊

敬表現」,「第三者謙讓表現」各場面のデータを中心に」『国立国語研究所論集』, 11, pp.147-166,国立国語研究所

- ・東条操編(1954)『日本方言学』, 吉川弘文館
- ・西岡敏(2011)「竹富方言の敬語補助動詞と対者敬語的終助詞」『日本語の研究』, 7-4,pp.55-67,日本語学会
- ・平山輝夫ほか(2003)『日本の言葉シリーズ 41 佐賀県のことば』, 明治書院
- ・藤原与一(1955)「「入らっシャル」などの「～シャル」「～サッシャル」敬語法について」『国文学攷』14, pp.1-16, 広島大学国語国文学会
- ・藤原与一(1978)『昭和日本語方言の総合的研究 第一巻方言敬語法の研究』, 春陽堂
- ・吉岡康夫(1995)「敬語行動と規範意識:肥筑方言域における言語行動調査から」『研究報告集』16, pp.33-55, 国立国語研究所

参考 URL

- ・佐賀県公式ホームページ「佐賀県の紹介」
<https://www.pref.saga.lg.jp/kiji0032157/index.html>

【資料】

面接調査で得られた回答をまとめたものを資料として示す。

項目 ii

- 1:「空気を緩めたい時。」「はよ席着きんさい」など。「はやく席につきなさい」よりも優しく言っているイメージがある。心を開いていることを表現したかったり、生徒と距離を近づけたりするために、あえて(方言敬語を)使う時がある。」(⑤) …親しみを表す言葉として方言敬語が選ばれているようだ。
- 2:「小学生の頃は「敬語」として認識し、誰にでも使っていたが、年が上がるにつれ使う相手が狭まった」(②)、「高校生の頃より小学生の頃がよく使っていた。受験の(中学受験)指導で、敬語ではないと指摘されたため、それ以降は親しい人以外には使用を控えている」(③) …国語科の授業における「敬語」や、生徒指導など学校教育の指導の影響が見られる。
- 3:「友人の母親(面識あり・親しい)について友人にたずねる時に、「元気にしとんさー？」と言いたいところを、「元気にされているの？」と表現しなくてはいけなくなり、その場合おかげさで冷たい感じ、初対面の人という感じがする。」(⑥) … [8] の質問の②と同じく、方言敬語の言葉を共通語で表そうとするとときに、ぴったりの表現がなく違和感を覚えている。

項目 iii

- 1:「学生の頃は「ンサル」をよく使っており、今でも「ンサル」の方が敬意の高い言葉であると感じる。しかし、学校で生徒と過ごす中で、生徒たちが「ンシャル」をよく使っているのを見聞きした結果、自分もつられて「ンシャル」をよく使うようになったように思う。」(④)
- 2:「父や母に対し、敬語を使っていた。特に父に対し砕けた口調で話しかけると祖母からたしなめられていた。」(⑥)
- 3:「敬語を使わずに話す、拳骨をもらっていた。自分より目上であればだれにでも敬語を使って話す。」(⑦)
- 4:「母も父に対し敬語であったし、祖母も父に対し敬語であった。自分もちろん、両親や祖父母に敬語を使う。」(⑨)

項目 iv

- 1:「使わない。「来んね」ならいうけど。」(①)
- 2:「ペットはいないため想像し難いが、「来んしゃい」などを使うことは) おかしいと感じる。道端にいる猫だったりにも使わないため、ペットがいても使わないと思う。」(⑦)

項目 v

- 1:「振り返って考えてみると、学生の頃は「ンサル」の言葉をよく使っていたと思う。ただ、教職につき生徒と接するようになって、「ンシャル」をよく使うようになった気がする。」(④)
- 2:「「ンシャル」を使っている人は、女性が多かったように思う。」(⑧)
- 3:「「祖母は、「ござった」「ござんした」というように「ゴザル」の言葉を使っていたと思う。「ゴザル」について) 古い言葉だなと感じる。」(⑨)